
インタビュー

ふぐるま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インタビュー

【Nコード】

N0217J

【作者名】

ふぐるま

【あらすじ】

『私』は悪魔にインタビューを試みた。

インタビューに応じた悪魔が語るある一家の物語。

(前書き)

長らくお待ちがういね。

Q：お名前と職業をどうぞ

「名前は……まあ、持ってませんね。呼ばれるほど偉いわけではないです。職業は悪魔をやっています」

Q：悪魔は職業なのですか

「はい。あなた方の言う天使だの悪魔だの神様だのはみんな職業です」

Q：種族とかではなく？

「ええ、本質的には同じモノがやっています」

Q：貴方はどうして悪魔に？

きっかけですか。それはある春のことでした。悪魔になるか天使になるか。それとも別の何かになるか。特に決まっていなかった私は人の世界でたいした目的もなくふらふらと漂っていました。

あっ！もちろん普通の人には見えませんよ。いわゆる『霊的なモノ』です。

ふらふらと、とある公園を訪れた時ですね。その少女に出会ったのは。

ブランコに腰掛けたその女の子は、まだ5、6歳でしょうね。穢れないきれいな目で私をじつと見つめました。

ええ、はい。驚きましたよ。明らかに私を見ているのですから。子供や一部の人間には私たちが見えるようですね。その時初めて知りました。

ただ、そんなことはこの場合問題ではないのですよ。問題なのは私

が。あはは、少し恥ずかしいですね。

正直なところ、私はその少女に恋をしてしまったのです。

黒曜石のような瞳に春の柔らかな日光を湛えたその眼が。肩まで短く切り揃えられたつややかな髪が春風に揺れて。きれいでしたよ。人の世界で見た何よりも。

しばらく見つめ合っていました。その時の幸せと叫びたらないですね。純真で無垢な、彼女の興味を一身に引き受けていたのですから。『高級な宝石を独り占めするような感じ』と言ったら分かってもらえますかね。良くも悪くも、興味を持たれる事。考えてもらえる事に触れられない私たちにとってこれが何よりの喜びなのです。

母親が迎えに来て、彼女は公園から出て行きました。公園の出口で振り返った彼女を見た時、無性に彼女について行きたくなくなりました。もう一度、いえ、一度と言わず何度でもあの至福を味わいたかったです。

彼女の家はわりと裕福でした。優しい父と母。兄弟はいないみたいでした。庭には大きな黒い犬を飼っていました。犬種は分かりませんがほっそりとした犬でした。私を見るなり吠えかかってきましたよ。気に入らない犬でした。まあ噛まれる事もないし気にしなければそれまでだったのですが。

彼女のが一人で居る時、母親が目を離した時、両親が寝静まった時、私は彼女の正面に回りその顔を覗き込みました。ただ、そんな時にどうしても邪魔が入るのです。あの犬です。私がうつとりと彼女を見つめると、敵意を込めて耳障りに吠えるのです。そのたびに私は現実を引きもどされ、不快な思いをしました。きつとあの犬も彼女が好きだったのでしよう。そして彼女もあの犬を撫で、話しかけ、私には向けない笑顔を向けるのです。彼女が犬の吠える声に気が付き、庭に出て犬を撫でる度に私の胸の内に暗いものが湧き上がりました。正直に言います。私はその犬に嫉妬していました。

死ねば良いと思いました。
殺してやろうと思いました。

残酷に、殺してやろうと思いました。

ある日私は彼女が両親と出かけた隙を見て犬に話しかけました。一言、二言。それだけです。狂ったように吠え続ける犬を後にして私は家の中に戻りました。彼女たち一家が帰って来るのが楽しみで仕方なかったですよ。

夕暮れ時に帰ってきました。彼女を真ん中にして親子三人。手を繋いで帰ってきました。陳腐な表現ですが、血のような赤い夕焼けでした。それは、愛と希望と幸福に満ち満ちた家族の笑顔と見事な対比を成していました。ああ今でも思い出すと体が震えます。犬は小屋に居ました。家族が家の中に入りました。しばらくして談笑が聞こえ始めました。後で分かった事ですが、この日は彼女の誕生日だったみたいです。

私は犬小屋の前に立ちました。犬が出てきて私の後に続きます。利発そうな眼は白く濁っていました。鎖を噛み千切った口からは血と涎がたらたらと。ははっ。酷い顔でした。庭に面したりリビングの窓の外に立ちます。日はすっかり落ちていました。星ですか？いえ、見ていません。きつと月も星も出ていない塗りつぶしたような空だったのでしょね。私の目はカーテンの隙間から漏れる暖かな光に、耳は時折聞こえる笑い声に、心は逆巻く嫉妬と独占欲に支配されていました。私は一度手を叩きました。それだけです。犬は窓悲鳴のような声を上げてガラスを突き破り、リビングに転がり込みました。家族の悲鳴と食器の割れる音。重い物の倒れる音。水気のある汚い音。明るいうリビングで起きる惨劇を光の届かない庭から聞いていました。

騒ぎが止んでから家の中に入りました。ええ、ええ。酷い有様でしたよ。リビングにはまず父親の死体。体中傷だらけでしたが、首の後ろ側が大きく裂けていました。きつとそれが致命傷になったのでしょうか。テーブルは倒れて、床に食べかけのケーキが落ちていま

した。生クリームに血が混ざって……。いえいえそんなにきれいな物ではありませんでした。土の混じった雪のような、汚らしいものでしたよ。血の跡が廊下の奥へと続いていました。廊下の突き当たり。彼女の部屋の前に母親はいました。ドアに寄り掛かるようにして事切れていましたね。右手の指が何本かなくなっていました。覆いかぶさるように犬の死体もありました。所々ガラスの破片が刺さっていました。ドアを通り抜けると部屋の真ん中に少女が立っていました。白いワンピースは胸の辺りまで、血を浴びてどす黒く染まっています。手にケーキを切り分けるナイフを持って。もう少女には私が見えなかったようです。死に触れて穢れてしまったのでしよう。

幼い彼女はまだ言葉にする事ができなかったようですが、その時彼女の心にははつきりと神様への憎悪が満ちていました。コレが私が悪魔になつたきっかけです。

現役悪魔へのインタビューを終えて私は考えた。なぜ、少女は飼い犬以外に笑顔を見せなかったのか。あの悪魔が言っていないだけなのかもしれない。気にする事ではないのかもしれない。もう一つ、犬は生きていたのか。いや、家族を仕留める事ができるほどの体力が残っていたのだろうか。窓ガラスを生身で突き破ればそれ相応の傷を負うだろう。犬は人と違い手や足で顔を守る事ができない。顔から突入したならばそれこそ致命傷を負ってもいいだろう。そういえば父親の死はどうなる。家族に襲い掛かる猛犬に背を向けたのだろうか。そうでなければ後ろから首を掻き切られることなんて無いのではないか。それよりも、鎖を噛み千切った犬に牙は残っていたのか。少女は最後に神を憎んだと悪魔は言っていた。最初にあの悪魔は、良くも悪くも想ってもらおう事が何よりの幸福だと言っていた。それならばアイツは神様になるべきだったのではないか？

彼女は両親に虐待されていた。度重なる虐待の中唯一あの犬だけが味方だった。ある日リビングに飼い犬が飛び込んできた。瀕死の犬に翻弄される両親の中に少女は地獄から抜け出す好機を見出した。犬と格闘し、屈む父親の首にナイフを突き立てる。飼い犬と娘の凶行を見て逃げ出す母親を追い、部屋の前で母親を刺す。重傷を負った母親は追ってきた犬と格闘しそのまま息絶える。地獄から抜け出した少女の心には『悪魔のような』惨劇を引き起こした『邪悪なモノ』への感謝が満ち溢れていた。

全て想像だ。証拠など何も無い。悪魔の見た通り少女の家庭は円満だったのかもしれない。その可能性のほうが高い。ただ、あの手の存在は嘘つきだ。やはり円満な家庭など……。

私は考える事を止めた。この仕事を長く続けるコツは深読みしないこと。知りすぎない事。考える事を止めて煙草に火を点けた瞬間視界の端に居た何者かが去っていった。

(後書き)

感想、批評、よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0217j/>

インタビュー

2011年1月25日02時06分発行